

イスラエルの人々⑫

□イスラエルの人々の信仰の手本（失敗から学ぶ）

さて、民は主に対して、繰り返し激しく不平を言った。主はこれを聞いて怒りを燃やし、主の火が彼らに向かって燃え上がり、宿営の端をなめ尽くした。（民 11：1）

□前回までの振り返り

1. イスラエルの民は、シナイ山のふもとで、主がモーセに命じられたとおりに、幕屋を製作し、設営し、油注ぎをして聖別した。
2. 前回は、宿営の仕方と旅をするときの進行の順序についての命令、そして銀のラッパ2本の製作とその使用法についての命令であった。

(1) 宿営の仕方

- ① 幕屋のまわりにレビ人が宿営する
- ② 幕屋の前方、東側にユダの宿営（ユダ、イッサカル、ゼブルン）
- ③ 幕屋の南側にルベンの宿営（ルベン、シメオン、ガド）
- ④ 幕屋の西側にエフライムの宿営（エフライム、マナセ、ベニヤミン）
- ⑤ 幕屋の北側にダンの宿営（ダン、アシェル、ナフタリ）

(2) 進行順序・・・ユダ、幕屋、ルベン、聖なるもの、エフライム、ダン

(3) 銀のラッパ・・・出発のとき、1本のラッパを短く吹き鳴らすとユダが出発。二度目に短く吹き鳴らすとルベンが出発。なお、「出発」以外の使用法も定めあり。

3. そして、いよいよ約束の地に向けてシナイ山のふもと（シナイの荒野）から出発した。エジプトを出てから2年目の第二の月（5月）20日のことであった。

民数記 10：11～12 二年目の第二の月の二十日に、雲があかしの幕屋の上から離れて上った。それでイスラエルの子らはシナイの荒野を旅立った。雲はパランの荒野でとどまった。彼らは、モーセを通して示された主の命により初めて旅立った。

(1) モーセを通して示された主の命により初めて旅立った・・・銀のラッパを吹き鳴らし、進行順序にしたがって旅立ったのは、このときが初めて。宿営地に着いたら幕屋を中心として東・南・西・北の四方向に宿営するのも、これからが初めてとなる。

(2) 雲はパランの荒野でとどまった・・・約束の地に入るための経由地は「パランの荒野」である。シナイの荒野を旅立って、イスラエルの民は、いくつかの宿営地をたどりながら、パランの荒野まで行った。その途中で起きた出来事の記録が、民数記 11 章～12 章 15 節。12 章 16 節からは、パランの荒野に到着したときの記事。

4. 今回は、パランの荒野に着くまでの途中での出来事である。

申命記 1：2 によれば、所要日数は 11 日。

□イスラエルの人々の信仰⑫ パランの荒野に着くまでの3つの事件

1. タブエラ（燃え上がる）事件（民11：1～3）

(1) 民の不平

1節 a さて、民は主に対して、繰り返し激しく不平を言った。

(2) 主の怒り

1節 b 主はこれを聞いて怒りを燃やし、主の火が彼らに向かって燃え上がり、宿営の端をなめ尽くした。

(3) モーセの執り成しの祈り

2節 すると民はモーセに向かってわめき叫んだ。それで、モーセが主に祈ると、その火は消えた。

(4) 地名の由来

3節 その場所の名はタブエラと呼ばれた。主の火が、彼らに向かって燃え上がったからである。

2. キプロテ・ハ・タアワ（欲望の墓）事件（民11：4～34）

(1) 民が大声で泣いて言った

4～6節 彼らのうちに混じって来ていた者たちは激しい欲望にかられ、イスラエルの子らは再び大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、玉ねぎ、にんにくも。だが今や、私たちの喉はからからだ。全く何もなく、ただ、このマナを見るだけだ。」



マナが降り始めてから、1年経過

(2) 食糧はマナだけ

7～9節 マナはコエンドロの種のように、一見、ペドラハのようであった。民は歩き回ってそれを集め、ひき臼でひくか臼でつき、これを鍋で煮てパン菓子を作った。その味は、油で揚げた菓子のような味であった。夜、宿営に露が降りるとき、マナもそれと一緒に降りて来た。

(3) モーセの苦悩

10～15節 モーセは、民がその家族ごとに、それぞれ自分の天幕の入り口で泣くのを聞いた。主の怒りは激しく燃え上がった。このことは、モーセにとって辛いことであった。

それで、モーセは主に言った。「なぜ、あなたはしもべを苦しめられるのですか。なぜ、私はあなたのご好意を受けられないのですか。なぜ、この民全体の重荷を私に負わされるのですか。私がこのすべての民をはらんだのでしょうか。私が彼

らを産んだのでしょうか。それなのになぜ、あなたは私に、『乳母が乳飲み子を抱きかかえるように、彼らをあなたの胸に抱き、わたしが彼らの父祖たちに誓った地に連れて行け』と言われるのですか。どこから私は肉を得て、この民全体に与えられるのでしょうか。彼らは私に泣き叫び、『肉を与えて食べさせてくれ』と言うのです。私一人で、この民全体を負うことはできません。私には重すぎます。私をこのように扱われるのなら、お願いです、どうか私を殺してください。これ以上、私を悲惨な目にあわせないでください。」

(4) 主の応答① 長老七十人にも民の重荷を負わせることとする（民 11：16～17）

(5) 主の応答② 民に肉を与えることとする（民 11：18～20）

(6) モーセの質問と主の答え（民 11：21～23）

21～23 節 しかしモーセは言った。「私と一緒にいる民は、徒歩の男子だけで六十万人です。しかもあなたは、彼らに肉を与え、一カ月の間食べさせる、と言われます。彼らのために羊の群れ、牛の群れが屠られても、それは彼らに十分でしょうか。彼らのために海の魚が全部集められても、彼らに十分でしょうか。」

23 節 主はモーセに答えられた。「この主の手が短いというのか。わたしのことが実現するかどうかは、今に分かる。」

(7) 七十人の長老の上に、神の霊がとどまり、彼らが預言した（民 11：24～30）

(8) うずらの大群が風で運ばれて来て、宿営の周りに落ち、積み重なった（民 11：31～33）

31～32 節 さて、主のもとから風が吹き、海からうずらを運んで来て、宿営の近くに落とした。それは宿営の周り、どちらの側にも約一日の道のりの範囲で、地面から約二キュビトの高さになった。民は、その日は終日終夜、次の日も終日出て行ってうずらを集めた。集めたのが最も少なかった者でも、十ホメル（2,200～2,300 リットル）ほど集めた。彼らはそれらを自分たちのために、宿営の周囲に広げておいた。

33 節 肉が彼らの歯の間であって、まだかみ終わらないうちに、主の怒りが民に向かって燃え上がり、主は非常に激しい疫病で民を打たれた。

(9) 地名の由来（民 11：34）

34 節 その場所の名はキプロテ・ハ・タアワ（欲望の墓）と呼ばれた。欲望にかられた民が、そこに埋められたからである。

3. ハツェロテ事件 ミリアム七日間宿営の外へ（民11：35～12：15）

- (1) ミリアムとアロンが、モーセを非難した。表向きはモーセがクシュ人の女を妻としていたことを非難の理由とした。しかし真意は、モーセひとりが格別の権威を持つことに対する妬みであった（民11：35～12：2）

11：35～12：1 キプロテ・ハ・タアワから、民はハツェロテに進んで行った。そしてハツェロテにとどまった。そのとき、ミリアムとアロンは、モーセが妻としていたクシュ人の女のことで彼を非難した。モーセがクシュ人の女を妻としていたからである。

2 節 彼らは言った。「主はただモーセとだけ話されたのか。われわれとも話されたのではないか。」主はこれを聞かれた。

- (2) モーセの人柄に関する主の評価（民12：3）

3 節 モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。

- (3) 主の怒り（民12：4～9）

4～9 節 主は突然、モーセとアロンとミリアムに、「あなたがた三人は会見の天幕のところへ出よ」と言われた。そこで彼ら三人は出て行った。主は雲の柱の中にあって降りて来られ、天幕の入り口に立って、アロンとミリアムを呼ばれた。二人が出て行くと、主は言われた。

「聞け、わたしのことばを。もし、あなたがたの間に預言者がいるなら、主であるわたしは、幻の中でその人にわたし自身を知らせ、夢の中でその人と語る。だが、わたしのしもべモーセとはそうでない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者。彼とは、わたしは口と口で語り、明らかに語って、謎では話さない。彼は主の姿を仰ぎ見ている。なぜあなたがたは、わたしのしもべ、モーセを恐れず、非難するのか。」

主の怒りが彼らに向かって燃え上がり、主は去って行かれた。

- (4) ミリアムはツアラアトに冒されて皮膚が白くなった。アロンは自分たちの罪を認め、モーセは主に癒してくださいと祈った。主はミリアムを七日後に癒やす前提で、それまで七日間、宿営の外へ締め出すよう命じた（民12：10～15）

15 節 それでミリアムは七日間、宿営の外に締め出された。民はミリアムが戻るまで旅立たなかった。